

第16部会

託宣、司祭になるためのイニシエーション、通過儀礼、祭など）を経験する、あるいは、学ぶためにヨルバランドを訪問、滞在する人々がみられるようになった。こうした巡礼とも捉えることができる文化実践のなかで、アメリカ黒人は、オリシャを崇拝するナイジェリア人やそれ以外のナイジェリア人たちと出会い、交流し、その関係を持続的に維持、発展させようと試みている。

それでは、オリシャ崇拝運動とヨルバランドとの関係はこれまでどのように議論されてきたのであろうか。たとえば、宗教的権威の授受に注目してオリシャ崇拝運動とヨルバランドとの関係を取り上げた研究がある（Hunt 一九七九、Clarke 一九九七、Pinn 一九九八）。Pinn によれば、ナイジェリアの伝統的なオリシャ崇拝組織の長が、儀礼的な宗教的権威をオリシャ崇拝運動の唱導者、アデフンミに与えたことによって、彼は運動の正統性と真正性を成員やアメリカ合衆国内外の社会に提示することができたと指摘する（Pinn 一九九八）。ただし、アデフンミの授かった宗教的権威が、その後運動の実践形態が変容していくなかで変化したことは議論されていない。ほかには、宗教文化教育の旅という視点からオリシャ崇拝運動とヨルバランドとの関係を論じた研究がある（Clarke 一九九七、二〇〇六、Eason 一九九七）。こうした研究では、アメリカ黒人が主体的に、一方のナイジェリア人（アフリカ）は客体的に記述、分析されている。そのため、運動の成員とナイジェリア人とは交錯するなかで相互に生じる問題、権威・権力関係、文化変容について十分な考察がなされているとはいえない。

そこで、本発表では、まず、オリシャ崇拝運動の唱導者や成員が、ヨルバランドのオリシャ崇拝組織とどのように接触しているのかを示す。つぎに、宗教的移動によって促されるアメリカ黒人とナイジェリア人との対話的な交流が、オリシャ崇拝運動にどのような影響を与えているのかを検討する。そのうえで、本発表はつぎの四点を明らかにする。一、オリシャ崇拝運動の拠点や運動の唱導者たちの正統性が相対化された、二、運動のなかで人種（民族）・宗教を横断する眼差しが培われている、三、運動のなかで客体化されていた「ナイジェリア人（アフリカ）」が、身体的な交流をへて同時代性を増しつつある、四、運動が再構築されることで、その集合性と連続性が維持されている。

カルティニにおける「新しい時代」の人間像

相澤 里沙

カルティニ（一八七九—一九〇四）は、インドネシアの国家独立英雄の一人で、女性運動や教育運動の草分けとして、またナショナリズムに先立って民族意識覚醒を促した人物として知られている。十九世紀の後半から、オランダの植民地であったインドネシアにおいては、現地人貴族（プライヤ）の中から、オランダ語の能力をもつ知識人たちが現れ始め、自らの思想を形成していった。カルティニもそのような知識人の一人である

と考えることができる。彼女がオランダ人に宛てて書いた書簡は、後に蘭領東インドの教育・産業・儀典省長官であり、文通相手の一人でもあったアベンダノンによって収集・編集、そして出版され、今も世界中で読み継がれている。本発表は、カルティニの理想とした「新しい時代」を明らかにし、これまで見逃されてきたカルティニのジャワ人への多様な視線について考察することを狙いとしている。

カルティニの「新しい時代」は、一九〇〇年十月初後で異なる。一九〇〇年十月以前においては、西洋と東インドを比較して、後者の批判を主として行っている。旧い慣習に捕われ女性を抑圧する東インドからの解放、その結果としての西洋化が「新しい時代」であった。その際に理想とされたのは西洋の女性ということになる。カルティニは慣習を保護するイスラームを批判し、自身がムスリムであることと、宗教そのものに懷疑的な態度をとっていた。しかし、変化は一九〇〇年十月に生じた。ネリー・ファン・コルという女性からの手紙によってカルティニに内面的な変化が生じ、宗教観も変化することになる。また、それまでは西洋化することが「新しい時代」であると考えられ、東インドは批判の対象でしかなかったのに対し、ジャワの美しさが探求され始めた。カルティニが美しさを求めたのは、自身の身近にある死者や精霊の観念と実践、そして貴族であるカルティニからは遠く離れた、民の世界における信仰であった。これらはともにジャワ特有のものと考えられた。しかし前者は疑問に付されることなく語られるのに対して、後者に対するカルティニの態度は曖昧であった。民の信仰は心を動かすもので

ありながら、迷信とも捉えられており、もし進歩によって取り除かれたなら、真の信仰がそのあとを埋めるべきものと考えられている。真の信仰は、カルティニが得た真の宗教と通じている。真の宗教は、カルティニをとりまく現実の具体的世界を超えた抽象的なもので、観念的に存在しているものであった。それをオランダ人に手紙という形で、現実のジャワを舞台にして語る際に、同様に抽象的な民の世界が想定されたのであると考えられる。民の世界は、貴族のカルティニにとってはリアリティを持たない世界であり、だからこそ美しさが求められたのである。

「新しい時代」を語る際の、カルティニの多様な視線を形成したのは、潜在的にある階級意識と彼女の特殊な経験であった。ヨーロッパ人小学校での経験、本国または東インドにいるオランダ人との文通、婚前閉居、周囲にいる抑圧された女性たちの経験によって、様々な対象と、それぞれ異なる距離をもった関係が形成された。カルティニの視線が向けられる対象との距離の違いは、カルティニの多様な視線を生み出したのである。

現在のインドネシアにおいて、カルティニは先述のようなイメージを持つて語られるが、本発表においてみられたカルティニのイメージとは異なる。カルティニが多様な視線をもつて考えた「新しい時代」及びカルティニ自身が、インドネシアにおいてどのように受容されていたのか、そしてカルティニの思想がいかなるオランダとの知的交流のなかで形成されていたのかは、今後の課題である。